

比較宗教学・異端：フィールドリサーチ  
エホバの証人の王国会館を訪れて

東海聖書神学塾  
教職志願者コース・基礎科2年  
野町 真理

1、エホバの証人（ものみの塔）の教理と歴史

創立者チャールズ・T・ラッセル（1852-1916年）はもと組合教会員であったが、聖書に示されている「永遠の刑罰」の宣告に悩み、ついに聖書の「永遠の刑罰」の教えを否定することによって解決し、自分の新しい啓示と称するものの宣伝に生涯をささげた。文脈を無視した恣意的な聖書解釈によって様々な教理を作り上げ、キリストの神性を否定し、聖霊は活動力であると主張することによって三位一体の神を否定する。異訳した「新世界訳」聖書を用いている。数々の預言を発表し、外れる度に変更を重ねている。ニューヨークのブルックリンにもものみの塔協会世界本部があり、そこが発行する出版物を用いた学びは証人をマインド・コントロールする。

エホバの証人は次のことを信じている。

- 1、イエスは1914年（1874年）から目に見えない様で再臨している。
- 2、伝道の主題は来るべき千年王国である。
- 3、神の御名はエホバである。

2、公開聖書講演会及びものみの塔研究に参加して

私が訪れたのは豊橋市内にあるエホバの証人の王国会館（二川会衆、南会衆）である。日曜日の午後からのプログラム、公開聖書講演会（PM3:00～3:45）及びものみの塔研究（PM3:50～5:00）に参加させて頂いた。エホバの証人の聖書解釈を学びたい旨を告げると握手と笑顔で快く迎えて下さった。会堂には110名程が座れる椅子が並んでいたが80名程の人が参加していた（午前にも同様のプログラムがあり、別の会衆の人たちが集うということを知った）。公開聖書講演会では長老の方が「預言のことばに注意を払う」という題でメッセージをされ、いろんな聖書の箇所を開かされた。内容は預言の伝達方法等についてであった。御子イエスの御名によって祈られるが、「エホバ神」ということばを初めから終わりまで使っておられた。ものみの塔研究では毎月2回発行されるものみの塔というテキストを用い、「エホバの組織と共に忠節に仕える」という項目を学んだ。書かれてある質問に会衆が手を上げて答えるというものであったが、組織に対するマインドコントロールをこのような形で行っているのだということが解った。

4、参加者の理解について

参加者との対話を持つ機会が与えられたので、キリスト教信仰を持っていて、将来牧師・伝道師になるために神学校に行っていること、比較のためにエホバの証人の聖書解釈を学びたい旨を告げ、キリスト教とエホバの証人の教理の違いを知りたいと切り出した。その方は大きな違いとして、どこで復活するのか（地上か天か）ということと、イエスをどういう方と見るか（最初に創造された人か神か）という二つがあると教えて下さった。その

方は以前2年半程キリスト教会に出席されていたが、三位一体のことがよく理解出来ず、牧師に尋ねたところ、「三位一体は2年半ぐらいでは解らないものだ」と言われ、納得いかずにいたところ、エホバの証人の訪問を受け、わかりやすい説明を聞いたのでエホバの証人の信仰をしていると語って下さった。心が痛む。また、「永遠の裁きをされる神というのは愛の神ではないですよ」と言っていて、天国も地獄もないことを信じておられた。何度かキリスト教の方と議論をなされた経験があるが、統治体の聖書解釈が絶対正しいという信仰を持っておられるので平行線で終わってしまったようだ。心が痛む。

## 5、感想

エホバの証人ということばを聞いて思い浮かべることはその伝道熱心なスピリットである。聖書に興味を持っている方のほとんどはエホバの方の訪問を受け、ものみの塔の聖書研究へと導かれている。今年の春に訪問していて出会った大学生の方は聖書に興味があり、エホバの証人の方から新世界訳の聖書を頂いて読んでおられた。その方の所には続けて訪問を行っているが、まさに本物を知っている私たちキリスト者に対するチャレンジであると感じる。そのような中で、私は今、以前エホバの証人の学びをしておられたご夫婦の方と毎週聖書の学びをさせて頂いている。これからも真理の柱である焼けない教会を建て上げていくためにしっかりと学んでいきたいです。

一つの事柄の取り組みが、多くの事柄へのよい取組を生み出す  
材料と材料なので、励まして下さい。

98.3